

浄土

monthly
JŌDO

11

November 2005



法然上人鑽仰会

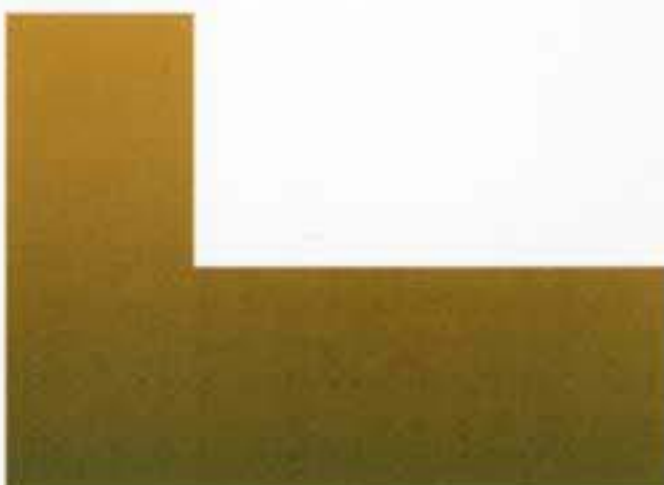


このたび生死を離るる道

浄土に生まるるに過ぎたるはなし

浄土に生まるるおこない

念仏に過ぎたるはなし



〔浄土宗略抄〕

昭法全五九〇

〔御法語を読み解く〕P. 20より

浄土

2005/11月号 目次

法然上人を語る②	ひろさちや	2
仏教コラム	大室了皓	11
高原静秋	吉田絃二郎	12
御法語を読み解く		20
表紙のことば	村上 健	25
会いたい人 池部良さん③	関 容子	26
響流十方	袖山榮輝	34
シネマ随想	袖山榮眞	38
珈琲のことば 珈琲のじかん	藤原理加	42
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会主催公開講演会より（平成十七年六月二十一日・大本山増上寺慈雲閣）

法然上人を語る

第2回

大正大学客員教授
宗教思想家

ひろさちや

イロハ順列付中 主門土承＝平福海賢
敬四十歳古＝く＝くやくマイマ
吉崎展鶴＝次郎

阿弥陀仏におまかせします

法然上人は私たちに何を教えてくださったのかという問題です。

結論から先に言いますと、仏様におまかせしておけばいいじゃないか。阿弥陀さんに全部おまかせしましょう。南無阿弥陀仏ですね。これを教えてくださった。

この南無阿弥陀仏というのはどういうことか、阿弥陀仏におまかせしますという意味なんです。では、阿弥陀仏というのはどういう仏様かといいますと、アミターユス、それからアミターバというサンスクリット語を訳して、その共通するのがアミタという部分なので、それを阿弥陀と音で訳しているわけなんです。

アーユスというのは命ですね。無限の命を持っておられる仏様。アーバというのは無限の光を持っておられる仏様。両方の部分がアミタ、無限ということですね。計り知れない寿命を持っておられる、または光を持っておられる仏様ということなんです。

でも、その計り知れないというのがアミタですが、逆に、このミタというのは計るという意味なんです。アミタのミタというのは計るわけです。計るというのは物差しなんです。アということとは、否定なんです。だから、計らない。これがアミタの意味なんです。「計れない」と訳すと無量という意味になります。無限ということになりますが、でも、元々の意味はアミタですから、「計らない」です。このミタというのは英語の一メートル、二メートルというときのメートルと同じ意味なんです。

計らない仏様なんだというのが阿弥陀仏だと思ってください。私たちはついつい物事を

計っちゃうんです。計らないようにしたほうがいいよというのが、南無阿弥陀仏だと思っ
てください。

私たちが悩むのは計るからなんです。病氣は悪いことだと思って計ると、病氣は悪いこ
とだからやめよう。何とかして病氣を克服しないといけない。それにはどうしたらいいか
となってしまうわけです。でも、病氣は好きでなったんじゃないでしょう。同じように、
引きこもりになった人だって、好きで引きこもりになったわけじゃないんです。どうして
も引きこもりになってしまったんだから、そうすると、あとしばらく続けるよりほかない
じゃないですか。

病氣になりましたと言う人に対して、「病氣になったんですか、それじゃもうしばらく
病氣を続けなさい」と私は言うんですが、そうすると相手はものすごく怒ります。でも、
「お続けなさい」と言っただって、続けようと思ったって続くわけじゃない。ひよっとした
ら治るかもしれないです。そして、治るかもしれないということは、治らない可能性もあ
るわけなんです。

大体、病氣は治るまで治りません。これははっきりしているんです。治るまでは治らな
いんです。治るまでの間、病人なんだから、病人である現状、それは現実認識なんです。
おわかりになりますね。

そうすると、「病氣は悪いことだからやめなさい」と言っただけで、やめるわけにいかないん
でしょう。やめるために一、二、三で効く特效薬なんてないんです。風邪だって、二、三
日ぐずぐずしないと駄目なんです。

じゃ、その間は風邪引いていればいいんでしょう。だから、自分が風邪を引いているということ虚懐に見ればいいのです。計らないでいるといい。悪いことだからやめようと思うからみんな苦しむんです。ここを仏教の難しい言葉で言わせてもらおうと、「如実知見」ということです。「如実」というのはあるがまま、あるがままにものを見なさいということなんです。あるがままにものを見るのが如実知見。これがあきらめることなんです。

あきらめるということ

あきらめるという言葉もまた難しいんです。あきらめるというと、みんなギブアップみたいに、もう駄目だ、断念するというふうに思うんですが、このあきらめるということは明らかにすることなんです。だから、物事の真実を明らかにすること。これが如実知見なんです。まず皆さん、自分の今ある状態をあきらめればいいんです。それをあきらめないで、欲の目でもってものを見るからおかしくなっていくのです。

例えば、わが子が死んでしまう。これは親にとって泣くに泣けない。本当に断腸の思い。それはそのとおりなんです。まして、交通事故なんかにあった場合、相手が悪い場合、犯人を憎むわけです。しかし、心はこれでは落ち着かないんです。殺された、殺されたという意識で考えていると、絶対に落ち着かない。いや、あの子は結局ただ死んだんだ、ただ亡くなったんだとすんなり言えることができたときに、本当に心が落ち着くんです。

ただ死んだ、ただ亡くなったんだよと物事をそういうふうな形で見るという訓練が、仏

教のあきらめなんです。

殺されたという意識が残っている限り、本当にあるがままを見ていないんです。被害者意識というのがあると、どうしてもものが歪んで見えるんです。私たちは権利意識でもって、現代の世の中の物事を計ってしまっているのです。

こんな話がありますよ。これは幸田露伴^{ろはん}の娘さんの幸田文^{あや}という方が書いているエッセイの中で出てくる話なんです。動物園の飼育係で名人芸の飼育係がいた。それがゴリラの檻に毎朝自分の指を一本突っ込むんですね。そうすると、ゴリラはその指を軽くかんでくれる。ゴリラという猛獣にそんなことをやらせる、もうみんなが舌を巻くような名人芸、そういう飼育係がいたんです。

ところが、この飼育係がある日むしゃくしゃしていた。腹が立ってならない。もちろん、ゴリラに腹が立っていたわけじゃなくて、同僚の間でちよつといやなことがあって腹が立っている。その腹立ち気分のままゴリラの檻に指を一本入れたんですね。そうすると、ゴリラはガブリとかんじやった。もう指がちぎれてなくなったわけです。

これが怒りというものです。もちろん飼育係はゴリラに怒っているわけではありません。でも、ゴリラにしてみたら、怒っている人間は怖いんです。

私も気をつけないといけないのです。女房に「もうそんなに怒るのはやめてください」と言われるんですが、「お前に怒っているんじゃない」と応じてしまいます。しかし、私が腹を立てている人間は別にいても、いま私の前にいる人間にすれば、やはり私に攻撃されているわけです。

怒りの状態というのは煩惱なんです。したがって、交通事故で息子を亡くした人の被害者意識というのも煩惱です。煩惱でものを見てはいけないというのが仏教の教えです。

要するに、如実知見ということは、計らないことです。阿弥陀さんは計られない、物差しを使われないということです。物差しを使われないということはどういうことかと言えば、何だっといういいということ。何だっといういい、これが要するに法然上人の教えの基本だと思ってください。

私たちはみんな計っているんです。だから、成績のいい子のほうがいいんです。成績の悪い子よりもいい子のほうがいいでしょう。貧乏人よりも金持ちのほうがいい。これは計っているんです。そうじゃないんだ。何だっといういいんだよ。そこに気がつきなさい。それが法然上人の教えだと理解してください。

何だっといういいんです。いや、そういう言い方はちよつと不正確です。正確に言えば、何だっといういいものは何だっといういいんです。ここを間違えないでください。何だっといういいものは、何だっといういいわけじゃない。何だっといういいものは何だっといういい。これを法然上人は教えてくださったわけです。

それでは、何だっといういいものは何かといえ、仏様がくださったものは何だっといういいんです。仏様からいただいたものは何だっといういいわけじゃないんです。人間の努力で獲得できるものは何だっといういいわけじゃないんです。

では、仏様からいただいたものは何かといえ、まず一つは子どもです。仏様からの預かりものだ。昔の人は子どもというのは仏様から授かったものだと思じていたんです。観

音様から授かった子どもだと昔の人は信じていたんです。そのように講演会で話したら、一人のご婦人が、「先生の話はよくわかります。でも授かった以上は私のものです」と、所有権を主張するんです。ですから、「授かる」というのはもう現代的には使えないと思って、今私は「預かる」と言っています。

子どもというものは預かったものです。仏様から預かったものは何だっていいんです。仏様の子どもであって、所有権は仏様にあるんです。それを私たちはお預かりしているんです。

中には目の見えない子どももいます。あるいは、足の悪い子どももいる。ハンディキャップのある子もいる。その子どもに「歩けるようになるといいのにね」と言えば、その子どもはどんなに傷つきますか。「この子は目が見えないんです。この子を目が見えないまま幸せにしてやってくださいね」と仏様は頼んでおられるんです。

それを、目が見える子はいいい子で、目が見えない子は欠陥があるんだ、障害児だなんて言うのはおかしいのです。障害という言葉は、私は嫌いです。それは計っているんです。私たちは勝手な物差しでものを見ているのです。その物差しをやめてくれというのが阿弥陀さんの願いです。計らないでくれと。

だから、ただ目が見えない子なんです。その目が見えない子を、目が見えないまま幸せにしてあげることが子育てです。「お父さん、ぼくは目が見えないんだ。でも、目が見えないぼくをこのまま認めてください」と言っているのに、目が見える方がいいなんて言って、大学病院を駆けずり回っているのは、その子がかわいそうです。

「お父さん、ぼくは勉強が嫌いなんだ。勉強いやなんだ。でも、ぼくをこのまま認めてくれ」と言っているのに、勉強しろ、勉強しろと言って、かわいそうです。その子を落ちこぼれにされたのは仏様なんだと思ってほしいんです。

しかし、世間の物差しはそうはいかないんでしょう。でも、仏様がその子をそうさせられたんだ。そう思ってください。

それから、子どもが成人して大人になります。そうすると、私の体は自分のものになるのでしょうか。みんなはそう思っているようですが、それもおかしいんです。

自分が成人になれば、今度は自分が自分をお預かりするんです。私が私を預かっている。具体的に言えば、この体ですね。この肉体は仏様からの預かりものだとして理解していただきたい。そうすると、この預かっているものはいずれガタがきますよ。仏様がガタがくるように仕向けてあるんです。それを科学的に説明すれば、遺伝子がそうになっているからだと言うんでしょうが、宇宙の摂理は仏様です。仏様のものなんだから。

だから、白髪が生えてきたら、白髪がいいんですよ。はげれば、はげが立派なんだ。仏様に全部文句を言ってくれ。年をとれば言うこと聞かなくなりますよ。それはそれでいいんで、しよぼくれればしよぼくれていいんです。何でしよぼくれちゃ悪いんですか。私たちはあるがまま、そのまま、何だっでもいいんです。

貧乏人であれば、貧乏がいいですよ。あえて貧乏になれと言っているんじゃないですよ。貧乏になったんだから、貧乏でいいじゃないですか。そして、自然に過ごして、宝くじが当たるかもしれないし、当たらなければいつまでも貧乏人を続けていればいいんです。

どうして貧乏が悪いんですか。

ところが、世間の人は貧乏が悪いものだと考えます。そして一生懸命努力して、頑張つて金持ちになろうとします。じつは、それが煩惱なんです。それで、苦しくなるのですよ。みんな仏様に任せておけばいいんじゃないですか。そうすると楽ですよ。これが法然上人の教えなんです。

私たちはまかせ切れないんです。「それでも……」と言うんです。「先生、そんなことを言うけれども、やっぱり子どもがちょっと向上してくれるほうがいいじゃないですか。成績が上がるほうがいいでしょう」と言うんです。「先生みたいなことを言っていれば、子どもがちっとも進歩、向上しないじゃないですか。進歩、向上がなくなってしまう。発展がなくなったらおしまいじゃないですか」と言われる方がおいでになるんです。

「それじゃ、小学校一年のときビリで、二年もビリ、卒業するときもビリで、中学校三年のときもビリ。その子は進歩してないと言うんですか。小学校のときに読めない漢字が読めるようになって、掛け算ができるようになって、体も発達していつているんです。どうして、万年ビリだったら進歩がないと言うんですか」と私は反論したいですね。

だから、何だっていいんです。でも、それが、どうしても私たちにはわからないんです。そういうけれども、こちらのほうがいいじゃないか……と言います。それが物差しなんです。おわかりになりますよね。

(つづく)

夜中に目が覚める。再びすぐ眠ろうとするが、様々な雑念が次々に訪れ、安眠を求める心がかき乱される。

楽しいものならばともかく、殆どは逆の苦しく悲しく辛い思いである。

懐かしい人と別れた悲しみ、心ならずも回りに迷惑をかけその人達に対して償いできない深刻な後悔の思い、それも遠い過去のものまでが続々と迫って、切り捨てようとするほど執拗にからんでくる。過去の妄念が去ったと思ったら現在の難題が迫ってくる。

夜の考え休むに似たりだ、明日考えれば良からう、と捨て切ろうとしても消えてはくれない。

ますます目は覚める。やむをえず起き上がり、台所でコップ酒に手を出して小一時間。ほろ酔いになって漸く眠りにつく。このような哀れな夜を度々送って

た。人に法を説く者として恥ずかしい限りであった。

ところが頭を切り替えたところ、不思議にも安らかに眠れるようになった。

それは簡単な事だった。

眼が覚める。今までは眠ろう眠ろうと努めたが、その思いを捨て、広い世間には災害に遭って、厳しい避難生活を送り、手足を伸ばして眠ることの出来ない人達が少なくない、にも拘らず私は安眠ができる、有り難いことだ、恵まれている事に感謝せねばナムアミダブ。

そしてゆったりと手足を伸ばしてみたら、今まで心を乱していた煩いは薄らぎ、何時の間にか深い眠りに落ちていた。

以後は眼が覚めると、布団の感触、静かな夜を、感謝とともに楽しむようになり、私を悩ました夜は二度とやってこなくなつた。

昭和15年10月号

原げん

静せい争い

秋 しゅう

吉田 絃一郎

今朝は浅間も秋晴れの美しい山肌を見せている。嶺は風が強いのであろう、南の方から白い雲が叩きつけるように山にあたっては、碎け散っては北の方へ散つてゆく。

落葉松の中の小徑を歩いてゆけば雛をつれた雉が俄かに足もとの草むらから飛んでゆくこともある。谷をへだてて山鳩の聲が聞こえて来る。

雀を追う威銃の音が山の死静を一層深くするように虚なこだまを傳えて来る。

朝ごとにたどる小徑ではあるが、朝ごとに異った心に映って来る。落葉松の間に見ゆる浅間も浅間の溪も一様に霧に包まれた朝は山の小徑も暗く、頼りなく思われる。落葉松の間にかざす浅間の山肌の明るく、秋の青空に溶け入るかに見ゆる朝は、道の邊に咲く松蟲草までもが爽涼として胸に迫る。

山の空は變り易い。信濃高原の雲の色はまことに美しい。その雲の色を仰いで高原の芒原を終日歩いて

も飽くことはない。しかしその空の色、雲の色も明朗陰翳につれて刹那々に人の心も變つて来る。昔の修行僧たちが高山のいただきに立って、還光に包まれた自分の姿を見て、來迎の佛のお姿であると思つたのも無理はない。高山に登る人々にはその心持ちは想像がつく。

山嶺の還光そのものは物理學的な現象に過ぎないかも知れぬ。しかしその還光を機縁として、雲と天空の光彩の上に立つかれ自身のその刹那の心はたしかに佛そのものに詣ずる程の淨さと幽玄さを感じているにちがいない。人間の心は機縁によりて佛ともなり、夜叉ともなる。

居は心に移すというのもこれであろう。深い人生を見るためには、深い人生を生きるためには、それに必要な居を準備しなければならぬ。古人が高山に獨居思索の聖窟をもとめたのもこの故であろう。

落葉松の中の小徑をたどりながら、わたくしはいろいろなことを思う。わたくしにとって朝の山徑は靜觀

静照の聖窟である。

わたくしはかつてその同じ山徑を内村鑑三先生と歩いたこともあった。内村先生は日本の基督教の叛逆児であつた。しかしその信仰は鐵の如く堅いものであつた。先生は人類最後の審判を信じ、キリストの復活を確信しておられた。先生は古武士的な風貌と信念とをを持った人であつた。この鐵の如き信仰は幾萬の人を動かした。無教會主義の先生が、二三度弟子達にすすめられて青山の青年會館で日曜説教をつづけられたことがあつた。毎日千五六百の聴衆が集まつて來たが、説教がすんで、みんなが帰つて行つた後を、會館の小使が掃除に行つて見るとあの廣い講堂に一片の紙屑も落ちていず、椅子は悉く擧げてあつたということを聞いた。

宗教は言うまでもなく信仰である。燃ゆるが如き信仰の力である。直ちに人の肺腑を貫く力を持つものでなくてはならぬ。

サヴォナローラは伊太利の文藝復興期に於ける大宗教家である。かれは火焙りの刑に處せられて死んだが、その信念は鐵のごとく堅かった。文藝復興期の伊太利人にとって神は偶像に過ぎなかった。かれ等は過去の神を殺し、信仰を踏み臺として、新しい時代を創造した。理性、科學の勝利である。

しかもサヴォナローラが立つて神を説くや、数千の市民達は堂外に溢れたといふことである。理性、科學萬能の時代に在っても宗教はなおそれ以上の力を内包している。サヴォナローラの信念である。宗教はいかなる世に在りても、最高最強の生命力である。

朝の山徑を歩いている間にわたくしは内村先生が住んでおられた別荘の前へ出た。アメリカのコツテージ風な建方の家で山の小屋といった感じのものである。かつて明治のころアメリカからグラント將軍が日本を訪ねて來たころ、將軍の宿舎として宇都宮あたりに建てたものだそうである。その建物を豊岡あたりの實業

家が信州まで運んだものだそうである。

わたくしは半ば草に埋もれたコツテーチに立寄って中を覗いて見た。Kといふ画伯が縁側に近く佛画を描いていた。K画伯は日本画壇の大先輩である。

画伯はいつも秋になって、都會の人たちが高原にいなくなるころを見はからってこの山荘に来ては雪の降るころまで繪を描くのである。

わたくしは縁側に腰を卸して画伯の示す佛画を眺めていた。

佛画を描く朝々の画伯の澄み切った心持ちは尊いものである。

佛壇の前に坐ってじつと佛の國を想像し、佛の國の姿を如實に觀じようとする氣持は誰も經驗するところである。しかしそれは朝夕わずか三十分か一時間のものである。

画伯は朝か半日、或は夕暮に至るまで佛画の筆を執っている。その間画伯は佛の國に参じているわけであ

る。佛画三昧の境地である。自分の佛の國に入る居を拵えている生活である。

昔の聖たちはよく自分で佛画を描き、佛像を刻んでおられるが、やはり同じ心持ちであろう。わたくしもできることなら佛画描き、佛さまを刻んで見たいと思う。繪を描き、佛さまを刻んでいる間は人は言葉にわずらわされることもなく、念々ただ佛を思い、佛に近づいてゆくばかりである。興教大師は五年の間無言の行を積まれたそうであるが、わたくしもせめて一日に三十分か一時間、黙々として佛の姿を描き、刻みたいものである。

グランド將軍の山莊を出てふたたび山の徑を淺間の方へ歩いて行つた。そのあたりには七八軒の山莊が一團になつて山の上を占めているが、わたくしは不図一軒の別莊の前に立ち止つた。門の傍には山桑が繁つてゐた。その主人は数年前内村先生と前後して亡くなつた。さらにその後ろの別莊でも主人が自殺をし、隣りの家では夫人が亡くなつた。

その別莊を通り抜けたところに亡くなつた妻の句

碑が建てられてあるので、わたくしは毎朝同じ道をたどるわけである。

わたくしは今朝も妻の句碑の前に立って考えた。わたくしは自分ひとりの悲しみのみを思っている。しかし誰も彼も同じ悲しみを持っている。人間は余りに早く死ぬ。わたくし自身も死なねばならぬ。死は直ぐ近くまで来ている。この刹那に佛の姿を見なければならぬ。大死一番といふ言葉は今日この刹那でなければならぬ。

谷の山鳩の声を聴いても、芒の原を吹いてゆく風の聲を聴いても「死に支度致せ致せ」と響いているように思われる。

今日この刹那わたくしたちは佛を見なければならぬ。

このたび生死を離るる道、浄土に生まるるに過ぎたるはなし。
浄土に生まるるおこない、念仏に過ぎたるはなし

「浄土宗略抄」昭法全五九〇

御法五門を

浄土み解く

青木 この御法話は、悩む若者が相談に来たときに、「悩みを解決するにはあの世に行くしか（死ぬしか）ないんだよ。あの世に行くには念仏を称えるのが一番だよ」と、乱暴に答えているようにも聞こえてしまう。でもそんな受け取り方では問題がありますよね。

長谷川 法然上人の教えの核心的な部分の御法話だと思います。仏教とはいかなる教えかと言えば「仏になるための教え」だとされています。これがキリスト教との決定的な違いだと思います。つまり成仏を目標にするのが仏教です。

しかし法然上人は時代を見、社会を見、人間を、さらにご自身を深く見つめられたときに絶望されたんだと思います。時は末法、社会も人間もどんどん悪くなっていく姿を目のあたりにした時、この世での成仏などとてもかなわないことに気づかれたのです。そこで、成仏を目指す仏道修行も汚れたこの世では不可能だ。その修行は極楽浄土でなければできないと覺られ、その浄土にいく唯一絶対の方法は念仏を称えることだと確信されたのです。

これはまさに万民救済の教えであって、法然上人が世界で初めて説かれた教えだと思います。

大室 生死しやうじを離れるの「生死」とは、生老病死の四苦を指しておられるのだと思います。この四苦のために悩み苦しむ、その苦しみ悩

みは生涯ついてまわります。ですから浄土へ行くしか救われる道はないんです。その浄土へ行くには念仏しかないよ、というのがこの御法話だと思います。

しかし『無量寿経』には、死ななければ往生ができないとは説かれていません。念仏を称えれば往生できるというのですから、現世にあっても往生があるのです。弥陀の本願によってこの身はこの世にあつたまままで往生が出来ます。

死後の往生を大往生といい、念仏に励んでいるうちに仏に抱かれて何の不安もなく楽しい日々を過ごせるようになる、現世にあつて浄土にいるような心境になる、これを小往生という方がありますが、小往生ができれば「生死」を離れることができます。私はこの小往生を目指して念仏に励みたいと思います。

佐山 この御法語の前後の文脈を無視していえば、生死を離れるとは、生死といった時間のようなものに規定されてしまう世界からの離脱をいったもの。このたびとは、まさにこのたび自分が出会った、自分自身の空間Ⅱ一生ということになるのではないでしようか。このたびでなくとも、いつでも浄土に往って生まれることに過ぎたこととはないし、むしろそれは必ず満たされる願いであり、称名念仏こそがそれを可能にするということ。法然上人の、誤読しようのない

決意が語られていると思います。

青木 『阿弥陀経』に「釈迦牟尼仏は、よく甚難・希有のことをなしたまえり。よく娑婆国土の五濁の悪世たる劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁のなかにおいて、アノクタラサンミヤク サンボダイを得てもろもろの衆生のために、この一切の世間に難信の法を説きたまえり」とありますが、お悟りを得られたあと、易行の念仏往生の道を、易行なるがゆえに容易に信じてもらえない難信の法を敢えてお説きになった。

要するに、念仏に励めばアノクタラサンミヤク サンボダイを得ることができる、悟りの境地に達することができる。生死の迷い、苦しみを越えることができる、と説いておられるのではないだろうかと思います。

佐山 現代の若者たちは、新・新宗教等の妖しげで半端な「密教的難行」に惹かれる。易行を説くことがかえって難しい時代になってきています。このような時代に、念仏のみ教えをどのように語りかけるのか。それは大きな課題だと思います。

真野 「生死」という字を見て、なんと読むか、「セイシ」と読んで

現代人のなかには迷う人が出てくるのではないだろうか。昔は誰でも分かっていた言葉でしようが、今の人には難しい御法話です。生死は梵語で「サンサーラ」といい、流転を意味します。迷妄の世界に流転している姿を指すのだと思います。生死を離れるとは悟りを得ること、この世では誰もが容易に離れられないが、浄土に行けば誰でも完全に離れることができる。

浄土宗だけが成仏の前に、往生浄土を強調し、以外の宗派ではみんな成仏を強調しています。ここに大きな違いがあります。

青木 浄土宗は成仏などいわないで、まず往生だといっています。

大室 「生けらば念仏の功のつもり……」の御法話の最後は、「死生ともにわずらいなし」です。これは「生死を離るる」と同じではないでしょうか。

2005

絵と文

村上健

早朝の温泉街

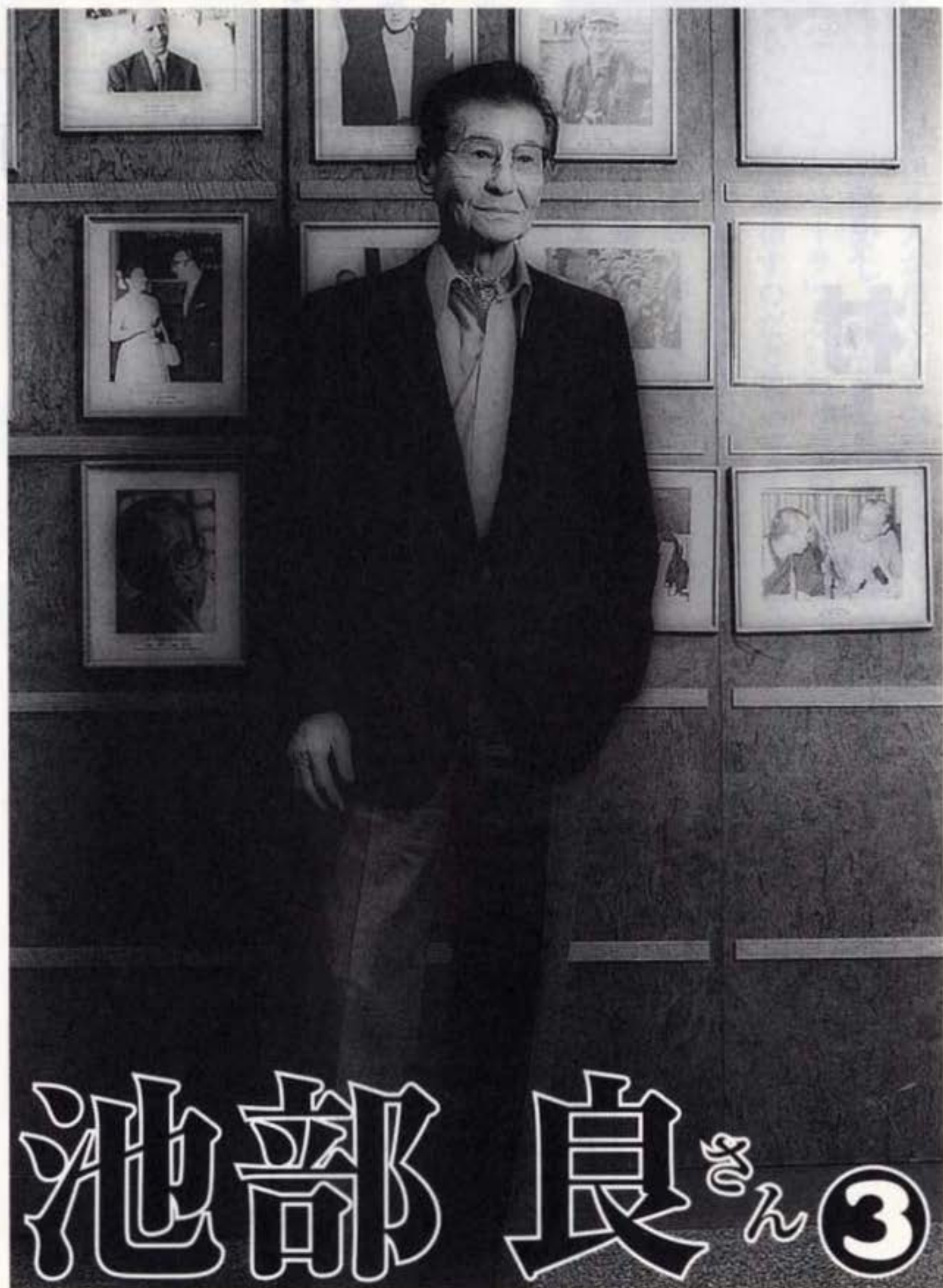
旅館の下駄を突っかけカラコロ、カラコロ。朝風呂に浸かり、あったまった体で、キーンと冷たく澄んだ空気の温泉街を散歩です。

ここは早朝の松本浅間温泉。袂に小さなスケッチブックとペンを忍ばせて坂道を上り下りしていると、脇をすり抜けたおじさんのバイクが角の店の前で停車。見上げると、おう、いいじゃありませんか、この看板建築。ちなみに看板建築とは、建物の前面だけをタイルや銅板で洋風に飾る、関東大震災以降に流行った商店のスタイルです。裏から見れば和風家屋というのが何ともアジア的で、私の大好きなモチーフなのです。

寒中で描くこと一時間。すっかり冷え切った体を、もう一度温泉であつためたのでした。

連載

会いたい人 関 容子



池部 良^{さん} ③

撮影／タカオカ邦彦

ちよつとありきたりなようではあるが、多くの出演作品の中で好きなのは？ と訊ねてみた。

「昭和三十年代に、東宝が小品だけど粋でエスプリの効いたものを作るという方針を打ち出して、その第一弾として志賀直哉先生の短篇『好人物の夫婦』を取り上げたんです。志賀先生とはその二年ほど前に、軽井沢の旅館の部屋が隣り合わせになって、いきなり仕切の襖がガラリとあくと、君は俳優なのに物を書いているが、何か書き上げたらあたしに見せなさい、あたしや、しがだがね、って言われてキョトンとしたことがあって（笑）それ以来どうも御鼠眉になつてゐたいなんです。で、一も二もなく引き受けたのがその日本画家の役で、奥さん役は津島恵子さん。住み込みのお手伝いさん役が青山京子君で、この娘が妊娠してぼくが大いに疑われるんだけど、嫌疑が晴れると人のいい夫婦はいそいそと嫁入り支度を整えて送り出すという、千葉

泰樹監督の作品。ダイヤモンド・シリーズと銘打つだけのことはあつて、好きな作品でしたね」

その三年後、池部さんは志賀直哉の御指名で『暗夜行路』の時任謙作役を演じている。

このときのエピソードを、共演した岸田今日子さんから聞いたことがあつた。今日子さんは吉原のお女郎役。四畳半の侘しい部屋のセツトで、赤い長襦袢一枚の姿になり、主役を待っていた。

「池部さんは日頃尊敬してる豊田四郎監督に、私のために楯突いてくれたのよ。カメラに向かつて胸を出すなんて、今日子さんに酷ですよ、って。そのおかげで背中の中からは撮ることになったの。本番では池部さんが私の胸を掴んで、豊年だ満作だ、って顔を埋めるんだけど、次のシーンでカメラが前に廻ることになったら、女性のスクリプターが、さつきはもつと胸をはだけてました、って言い張るの。そしたら池部さんが、君はなぜ同性



昭和45年頃、多摩川土手にて

として岸田さんをかばってあげないんだ、つてとっても怒ってくださったの」

これを池部さんに伝える。

「ああ、よく憶えてますよ。映画は芝居と違って真似だけじゃあすまないから、ごめんよ、つて言つて本当に胸を掴んだけど、岸田さんがそんなふうと言つてくれて、嬉しいなあ」

また、前に篠田正浩監督からこんな話を聞いた。池部さんの歩く姿がすごくいいから、と『乾いた花』（昭和三十九年）に出演交渉をすると、池部さん。「じゃぼくは、歩いてだけいればいいんだね？」

「そうそう（笑）、歩く、で思い出した。ぼくの夢のシーンで、止まってる赤い車の中に恋人役の加賀まりこさんがいるんじゃないか、というんで走って行くカット。ここは小幅で駆けないで、ロングストライドでお願いします、つて。それを早廻しで撮つてスローモーションで見せたから、自分で言うのもヘンだけどみごとに成功して、とてもかつこよ

く撮れてましたね」

池部さんはこうして俳優生活を楽しみながら打込んでいるうちに、気がついたら四十歳を過ぎても独身だった。

「恋愛の映画撮るとどうしてもお互いに好きになるものだし、またそうでなきゃいい恋愛ものは撮れませんね。でも最初のころ、島津保次郎監督に言われたんです。撮影所の囲いの中にいるときは俳優でいいが、ゲートの外へ出たら戸籍謄本の池部良になれ、つて。女優というのはまあほとんどがエゴの固まりでね（笑）。お弁当作つてくれたりセーター編んでくれたり、そういう女らしさのある人は逆に女優としては大成しない。とにかく女優さんを奥さんにしようとは全然思わなかった」

池部さんは四十二歳でお見合いをする。

お相手は森永製菓創業者の令嬢美子さん、当時二十歳だった。

「山本嘉次郎監督が会長をしてた『猫の会』という、愛猫家の会にいた女性でね。あるとき嘉次郎夫人がぼくに、結婚する気持ない？って。ぼくにまだそんな気はなかったんだけど、それが縁というもののなか、ボウリング場で偶然出会ったみたいに仕組まれて、数日後にはドライブをすることになった。熱海あたりで、美子、おなががすきました、でも、ナマ物を食べてはいけないと母に言われました、というんで重箱という鰻屋に入ったけど、いちいちうちに電話をかけて報告するのよ。お母様、食事がすんだところですけど、今のところ危険はございません（笑）。とにかくユニークなお嬢さんで、かえってそれが新鮮だったのかも知れない」

その令嬢は池部さんが有名な映画スターであることをまったく御存じなかったそうだが、当時そんな人がはたしていただろうか。ということだったので、先日、池部家に電話をしたとき、奥様にそのことを訊ねてみた。

「あら、私、本当に知りませんでしたのよ。うちの母親なんかあの人に、どちらへお勤めですか？って訊いたくらいなんですから。私も三船敏郎さんのことをサンセントシロウって読んで、びっくりされたんですからね（笑）」

そして「ぼくう、お電話よ」と明るい声が響いてきた。池部家では新婚時代からずっと変わらず、奥様は池部さんを「ぼくう」と呼んでいるらしい。

「見合いのあと、家内が仲人を通じて申し出た条件は、一つはアメリカへ遊びに連れていくこと、もう一つは猫を飼ってもいいということ。他愛のない条件だからすぐ承知をして、結婚ということになりました。ぼくの両親が存命中に安心させることができて、これもよかったと思っています」

結婚は昭和三十六年五月。式は池部さんの母校である立教のチャペルで、披露宴は帝国ホテル。そして生活は世田谷の等々力でスタ

ートした。

「新婚のころ、家内はぼくよりも早く起きて床に正座すると、お早うございます、って礼儀正しく挨拶をするのよ。どうしてそんな固苦しいことをするの？　って訊いたら、母が申しますには、俳優というのはつられ性^{しょう}だから、最初に正しいお作法を見せれば拍手もそうなります、って。つまりこれ、夫操縦法だったんだね（笑）。しかしそれも半年で飽きたらしくて、今度はぼくがお早うって言うところさいわね、って（笑）」

池部さんは名エッセイストだけれど、話を面白くするためにかなりの脚色があるのじゃないか。書かれる奥様の被害が思いやられる。「よく文句を言われるけど、別に嘘じゃないですからね。家内は最初のころは等々力のぼくの家が気に入ってくれてたんだけど、連れて嫁入りしてきたシャム猫のミミーが死ぬと、カラスが並んで家の中を覗きこむからミミーが心臓麻痺を起こしたんだわ、と妙な理

屈を言つて、それからしばらくしたら突然麻布の実家へ帰ってしまった。慌てて電話をすると、そこのおうちはカラスに睨まれて気持ちが悪いから売ることにして、もう買い手も決まったの。当分ここに二人で居候して、この近くにおうちを建てましょうよ、って。そんなこと、ぼくにひと言の相談もなく決めちゃうんだからひどいでしょう。でもそれを口に出したらあとが大変（笑）。ぼくも居候をして一年半後に、今住んでる家を新築して引越しましたけどね」

しかし麻布の新居にやってくるカラスの数は、等々力の比ではなかったそうだ。

「ぼくう、あのカラスども、何とかしよう、と口癖のように言つてた家内が、そのうち馴れてきたら憎からず思うようになったらしくて、ある朝ぼくに、いいものを見せてあげる、と言うのでついて行ってみたら、玄関先にチヨコンとカラスが二羽。お、チャンスだ、傘で殴ってやるか、と言ったら、冗談じゃない

わよ、このお二人さんは可愛いのよ、つて
 (笑)」
 池部さんの若々しさは、この可愛い奥様あ
 つてのことかも知れない。

私は東映の任侠映画というのを観たことが



インタビュー記事を読んでうらやむ関容子さんの友人(池部フアン)のために開いた食事会で

ないが、たった一本『冬の華』(昭和五十三年)だけ、脚本の倉本聰さんに当時インタビュする関係で観た。池部さんはタイトルの前にちよつと出てきて、高倉健に呆気なく殺されてしまう役だったが、今ではそのシーンしか覚えがないほど、強烈な印象だった。

「ぼくが東映の『昭和残侠传』シリーズに出るようになったのは、緋牡丹お竜の藤純子さんのお父さん、俊藤プロデューサーに口説かれたからなんです。ある晩、ロケ先の京都の宿屋へ訪ねてきて、池部はん、あたし、『乾いた花』観ましたぜ。あのインテリやくざ絶品でおました。あたしはやくざ映画の形式を取って男の友情を描きたいんです。あんさんのお力で、高倉健を男にしてやってもらえまへんやろか……ってさすがにうまいですね。任侠映画そのままの頼まれ方に、すぐ屈服したんです」

結局、『昭和残侠传』シリーズは昭和四十年から九本製作され、大当りを取った。そして『冬の華』の話になる。

「ああ、あれを褒めてもらうのは有難いな。これも倉本聰さんに巧妙な頼まれ方をしてね。良さん、ビール瓶に王冠であるじゃない。あれがあるから中のビールがうまく保たれてる。あれはただの栓じゃなくて王冠ですよ。

良さんがタイトル前で殺されて、初めて中身が味わえるんです……なんて乗せられてね（笑）。かなりの人たちからあのタイトル前はよかったと褒められたけど、でも考えてみるとこれだけ長い俳優生活なのに、ぼくは一つも映画で賞をもらってないのよ」

演技賞というのは体当たりの演技で熱演したり、脇で皮肉な味わいを見せたりする俳優に有利で、池部さんのようにいつもおっとりを中心にいる存在は対象になりにくいのかも知れない。

「ぼくは撮影前にいろんな演技パターンを考えてます。それを一つ一つ消していく。すると結局何も考えないでポーズと演じるように見えちゃうのかな」

それが正統的二枚目の演技というものだろう。お米を削りに削って芯だけにして、大吟醸のきれいなお酒ができるみたいに。

「ハハハ ではお言葉に甘えて……そういうことにしてください」
(おわり)

はなこう
花香をほとけにまいらせ候事。

答う。あか月は供養法にかならずまいらせ候。ただははながめに
さし、ちらしても供養すべし。香はかならずたくべし、便あしく
ばなくとも。

【法然上人「百四十五箇條問答」】

お花やお香を仏さまにお供えすることについてはいかがでしょう。

お答えします。明け方には、ご供養の作法にのっとりて必ずお供えするものです。ふだん
は花瓶に生けたり、散華してご供養なさい。お香は必ず焚くようになさい。都合が悪い時
にはその限りではありません。

徳の香り

「この香炉をお使い下さい」

勝手知ったるM家の仏壇の前。経机の下から焼香を回すのにうってつけのお盆を取り出した時、もう七十は過ぎているであろう女主人が小ぶりの香炉を差し出してきた。

この日は、Mさんの旦那さんの七回忌、そして天逝した息子さんの三回忌である。故人を偲ぶに自宅ほどふさわしい場所はないが、お二人のご法事を、ご自宅で、ごく身内の者だけを招いて法要を営もうというのである。ただ困るのは仏具が揃わないこと。たとえば焼香用の四角い香炉などはまずない。だからお焼香の段となると、仏壇の香炉を拝借して盆に乗せ、持参した抹香入れ（香合）を添えて、参列者にお盆をとり回してもらうのである。

一年前、息子さんの一周忌をやはりご自宅で営んだ際も、そのように焼香を回したはずと思っていたのだが、いざM家仏壇の香炉を見やると、これが思いのほか大きい。お盆に乗せるには少々重たそうで戸惑っていると、Mさんがすかさず小ぶりの香炉を差し出したというわけなのである。

きつと前回は私は香炉のことで戸惑っていたのだらう。Mさんはそれを憶えていて、今回、あらかじめ焼香用の香炉を用意されていたのである。

ところで焼香には、それ専用の炭を用いることが多い。割に長い時間、火種が保たれるのだが、わが街長野のように、ご自宅で法要を営んだ後、供養の食事のため別席に移る場合など、留守宅に火種を残すことになる。私はそれがいやで、焼香には炭を用いず、適当な長さに折った線香四〜五本に火をつけ横に寝かせ火種としているのである。

この日、M家の法事でも別席の食事が予定されていた。当然、私は線香を焼香の火種にするつもりで参上したのだが、Mさんから受け取った香炉には金の砂が敷き詰められていた。

じつは線香で作る火種は火力に乏しい。灰の上でこそ火力が保たれるが、砂の上などでは熱が奪われ火種が消えてしまうのである。残念だが、用意していた香炉では火種が消える。灰の入った仏壇の香炉を使うしかなく、せつかくご用意いただいた香炉であつたが経机の下に置き、経を読み始めた。

でも、である。Mさんはどんな思いで金の砂を用意したのだろう。

どんな思いで金の砂を敷き詰めたのだろう。気になった。

旦那さんのため、息子さんのため、おあつまり頂いた方々に気持ちよくお焼香していただく。各々が憶えている故人の思い出を傷つけないようにしよう。

そして、今も、故人のことを愛おしく大切に想っているという妻の思い、母の思いを極楽浄土の故人に伝えたかったのではないだろうか。

焼香の火種は線香と決めつけ炭を用意してこなかった私は、故人を愛おしむという遺族のごく当たり前な気持ちを踏みにじったのではあるまいか。そう思うと、読経中、何度も線香に火をつけては経机の下の香炉にくべるのであった。結局、火種を作ることとはできなかった。けれども私はMさんに供養する心を見たとように思う。

法然上人は供養のためにはお香を焚くべきだが、なければないで構わないと仰った。焼香という行為そのものよりも、供養したいと思う心が尊いのである。

釈尊は「徳を積む善人の香りは風に逆らってでも進んでいく」（ダンマパダ第54偈）と説き示された。Mさんが用意した香炉を使うことはできなかったけれども、香炉に託したMさんの思いは、きつと芳しい香りとなって浄土の故人を喜ばせていることだろう。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

袖山榮眞 SCREEN

シネマ随想

ダウン・イン・ザ・バレー

監督・脚本 デヴィッド・ジェイコブソン



平成18年正月シネマライズにてロードショー

©2004 DOWN IN THE VALLEY, LLC. ALL RIGHT RESERVED

英語の「ヴァレイ」は、「谷間」として思い描かれるイメージよりも遙かに広々としており、大河の「流域」とか「盆地」を意味することもあるが、ともかく相対的に「低いところ」を示すことに变りはない。

だから「ダウン・イン・ザ・バレー」とのタイトルの背景に、咲き乱れる黄色い野の花に包まれた恋する二人を配したポスターを見れば、誰しもこの舞台を平地と想定するだろうが、実はさにあらず。スクリーンにこのシーンが映し出されるとき観客は、舞台が山腹「アップ・オン・ナ・ヒルサイド」とでもいうべき地形にあることを知らされる。

それもその筈、この「ヴァレイ」はそんじょそこの「ヴァレイ」とは違うサン・フェルナンド・ヴァレイなのであって、ちょうど「ハマッ子」という場合の横浜が、全国津々浦々の浜とはハマが違うのと軌を一にする。面白いことに「ハマトラ」と呼ばれるファッションが流行語になったところ、偶然、太平洋の彼方では「ヴァレイ・ギャル」「ヴァレイ・スピーキング」なる新語が生まれた。「ランダムハウス英和大辞典」第二版に「ロス・アンゼルス郊外のサン・フェルナンド・ヴァレイの高級住宅街に住み、流行の先端をいく十代の少女。一九八二〜三年

に全米に広がったが、八四年には風俗と俗語の一部を一般の若者に伝えて、次第に目立たなくなった」と、やや生硬な定義がなされており、いわゆる「ドーナツ現象」によってロスの北西郊外に忽然として出現した高級住宅街と、十二レーンの車線を誇るフリーウェイが「野の花の咲き乱れる自然」を「ダウン・イン・ザ・ヴァレイ」の地域から、山手に追い上げてしまった経緯が推測され、さらにヒロインの「邸宅」も「高級住宅」なるべしと想定されるのだが、実はさにあらず。犬の走り回る広い芝生やプールは言わずもがな、ヤシのブッシュのほか植込みすら見えぬ、つつましかなシンダーブロック住宅が、空港の滑走路の如き広大なフリーウェイが撒き散らす、自動車の騒音に四六時中、吹きさらされているのであって、何とも「興醒め」といわざるをえない。

そうだ。「興醒め」「肩透かし」「幻滅」こそ、あの絶えまない車輪のノイズさながら、この作品の「通奏低音」を形成する。すでに二回用いた「想定するだろうが、実はさにあらず」との言い回しも、勝手に思い画かれたイリュージョンを、否定もしくは修正する、サン・フェルナンド・ヴァレイの「現実」を観客たちに意識させる巧妙な「仕掛け」だったのだ。

この「現実」のヴァレイに、チヨーとかウルトラの強調辞にふさわしいイリユージョニスト、ハーレン・フェアファクス・カイザラス（エドワード・ノートン）がダウンして来る事によって、悲喜劇が展開するのだが、その前にヒロインの家族たちを紹介せねばなるまい。

何らかの事情あって父子家庭である。姉は十七、弟は十三とあっては、シングル・ファーザー（デヴィット・モース）たるもの「厳格」ならざるを得ない。しかも彼の職業たるや「刑務官」とある。趣味の一つにガン・コレクションがあり、西部の男の中の男、かのワイアット・アープも愛用した一八七三年モデルの口径〇・四五インチ、コルト・ピースメーカーを始めとする「逸品」ぞろいである。ついでながら彼自身の「逸物」の家庭外使用については暗黙の了解が成り立っているらしいが、深夜玄関先で演じられる別れの儀礼の物音が、ナーヴァスな息子、ローニーの安眠を妨げることもある。

年齢のわりに小柄であることを始めとするいくつかのコンプレクスと、それらの反動としてのプライドとの微妙なバランス、そして父親に抱く「あき足りなさ」の感情と、その反動としての「男の中の男」に対する無条件の憧憬、これらを見事に演じ尽したローリー・カールキ

ンについては、当初「新人の起用が予定されていたが、最終的には、あまりにも役のイメージにあっている」という理由でローリー・カールキンが選ばれた」との劇場用パンフの内輪話にうなずくばかり。

かれとヒロインのトープ（エヴァン・レイチェル・ウッド）が、オープニングのシーンで佇むのが、フリーウェイにかかる長い長い、しかも幅二メートルそこそこの横断歩道橋で、たぶん安全への配慮から両側に張り廻らされた金網が「檻」を連想させる空間であることが、彼女の恒常的逼塞感の象徴であり、そこに漂い流れる「フライ・スパロウ」という歌詞が、次なる彼女の行動を予告する。

夏の或る日、四、五人のヴァレイ・ギャルたちとトープは車に相乗りしてビーチに繰出すこととなる。給油に立寄ったガソリン・スタンドで、カウボーイ姿の給油係と言葉を交すうち、面白半分、海岸に誘ってみると意外や意外、相手はクビにされるのを承知の上で、車に乗込んで来るではないか！ 風態も変っていれば、行動も突飛なこの若者こそ、いわずと知れたヒーローのハーレンで、人目の及ばぬ沖合はるかで始まる幼い恋のたわむれはその日のうちに屋内のセックス・シーンに発展するい

っぽう、翌日にはハーレンはローニー少年の眼にも、頼もしい存在として映ることとなる。ちょうど『シェーン』の、ブランドン・デ・ワイルドにおけるアラン・ラッドのような……。

このあたりで「転調」が始まる。

ガソリン・スタンドをクビになったハーレンが、持て余す時間の一部は、なんと観客不在の「西部劇ゴッゴ」にあてられているのだ。アパートの一室。床を転げ回って連射される銃弾を躲したり、ソファを楯にリヴォルヴァーに弾丸を充填し、油断なくガンを構えつつ、見えないう相手を大声で脅したり、説得を試みたり。ローニーの年代なら終日うつつを抜かしていても何ら異とするに足らない、たわいない遊びに、文字通り「余念のない」青年の表情に漲る一種の「鬼気」！ チョーもしくはウルトラ・イリュージョニストと呼ぶゆえんであり、時としてイリュージョンと現実との見境のつかぬハーレンに惹かれる姉と弟が巻きこまれる悲劇と、そしてハーレンが演ずる喜劇もしくは茶番劇は、ジャンルとしての「西部劇」そのもののパロディとなる。ちょうどもう一人のウルトラ・イリュージョニスト、ラ・マンチャの「憂い顔の騎士」の物語が、ジャンルとしての「騎士道物語」の

パロディであったように……。

例によって蛇足を三本

一、以上もつぱら否定的な意味でイリュージョンを使つて来たが、かの『大いなる幻影』^{ブランドン・イリュージョン}を例に出すまでもなく、イリュージョンの持つ肯定的な側面^{ネガティブ}にこそ、人間そのものの——従ってハーレンの——存在理由がある。

二、西部劇マニア必見の名場面、名セリフがあちこち仕掛けられている。

三、ハマトラは一九八一年版『現代語の基礎知識』（自由国民社）に「横浜（元町）ニュー・トラディショナルから」とある。流行に超然としたトラディショナルな服装である筈のものを、そのまま流行のファッションに転化させるハマト子たちのプライドは、ヴァレイ・ギャルたちの自意識に匹敵するものがあつただろう。

（長野・十念寺住職）

珈琲のことば

その一

「豆」

「モカ・マタリ」

じかん

突然のタイトル変更に「あれ？」と思われた方もいらっしゃるかと。晩秋のこの季節、日本酒は遂に「仕込み」の時期へ。今頃はきつと全国約千五百の酒蔵で、杜氏や蔵人たちが精魂こめて新たな美酒を目指し麹をモロミをふつつつと醸し始めていることでしょう……。そこで、しばらくは珈琲タイムを。よい珈琲というのも、日本酒に負けず劣らず、日々の豊かな時間には欠かせない宝物ですから。

それにしても、毎朝欠かさず珈琲を飲み続けて二十年。にも関わらず、正しい豆の知識に乏しいことに我ながら驚きました。厳選した豆を丁寧に自家焙煎し、その豆を達人技で淹れてくれるカフェD。

そのカウンターで、驚くほど豊富な豆のメニューを見つつ、「どちらかというところ苦味系が好きで、酸味の強いものは苦手」といった私の言葉から、その話は始まりました。マスターによると、「実は、どの国で穫れたものでも、質のよい豆程、酸味と香りがあるものなんですよ」と。私が今まで「酸っぱい！」と苦手にしてきたのは、「豆の酸味」ではなく多分に「酸化」劣化、日本酒でいえば「老ね」の酸味だと。本当にいい珈琲豆の酸味というのは、甘みと香りを含んだ心地よいものなのだ。一方、苦味というのは焙煎の仕方によることが多く必ずしも豆の特徴ではない。まさに目からウロコで

藤原理加



した！　そこから、いとも奥深い（しかも日本酒とも通じるところ多々の）「豆」についての素敵な講義が始まったのでした。マスターの話によると、珈琲豆を味の傾向で分けると大きく3つに分類されるそうです。①癖がなく落ち着いたブラジルやトラジャなどの中南米・アジア・オセアニア系②爽やかなブルーマウンテン（キューバ）やクリスタルマウンテン（ジャマイカ）などのカリブ海系③それぞれかなり個性的なケニアやキリマンジャロ、モカなどのアフリカ・アラビア系。そして、それらの豆をよくよく味わうと、「珈琲豆もやはり農作物なのだなあ」とわかる。つまり、豆自体がその土地の風土を感じさせてくれるというのです。

たとえば、カリブの島々の豆はカリブソの音楽にも通じる軽やかで爽やかな感じがあるし、ケニアの豆はどこかサバンナの大地的のような味わいがあると。ああ、なんて面白いのでしょうか！　感動する私に、マスターは「妖しく甘い酸味がお薦め」と、世界最古の珈琲と伝承されるアラビア・紅海周辺の豆「モカ・マタリ」を出してくれました。酸味系の代表と思って敬遠していたモカ。しかし、その酸味は確かに甘く妖しく…美味！　二十一年目の大発見です。「じゃあ、次は珈琲の吟醸酒ともいえるブルマンの端正な酸味を試してみますか？」。大きく頷く私なのでした。

浄土誌上句会

●長

〈特選〉秋の浜遊び仲間の長話

山口 信子

幼い頃よく遊んだ砂浜だろうか。座り込んで話をしていると、次々に話題が広がって、つい時間を忘れてしまう。ア段音（アカサタ等）を十一音も使い、しかも全体に軟らかい音なのがよく利いている。

〈佳作〉長谷寺へ渡る吊り橋菽の花

河合富美枝

秋灯や長き電話の愚痴ばかり

中島富士子

共有の長靴ゆるく秋耕す

周東 澄江

●谷

〈特選〉谷折りの谷は深くて十二夜

鷺見 一平

折り紙の折り目が内側になったところだろう。しっかりと折った折り目が、中の句で自然の谷をふと思わせるようなところがあつて、

●自由題

それが十三夜に響いてゆく。折り紙と名月の
取り合わせは面白い。

〔佳作〕 しばらくは溪谷に沿う雁の列

片桐てい女

藁葺きのわずか残りし谷戸の秋

大場 清

谷合いのほどよき風や萩の道

浜口 佳春

〔特選〕 薄物の人の残り香 終電車

中村 真一

終電車で客は少ない。近くに座していた薄物の女性が降りて行った。その動作によって、香水の香りが鼻をくすぐったのだ。これは着物でないかと困る。それも中年と見たい。いろいろ思いがふくらむ。

〔佳作〕 紅葉かつ散る童顔の自衛官

国立 規夫

棚経の僧熱き茶に合掌す

寺下 忠至

忌に集うのみの弟妹秋の風

吉崎美和子



浄土の広場

参加作品.....編集部選

長

ひとくぎり訪う客ありて夜の長し金谷 友江
 炎天の下長々と続く蟻の列 山本美代子
 一輪の首長くして百合の花 大場 清
 長き帯野に置く如く曼珠沙華 中島 一子
 長谷寺の南無観世音小鳥くる 佐藤 雅子
 すき焼きや長期出向の子が帰る 片桐てい女
 長老の語り受け継ぐ防災日 石原 新
 夏木立長椅子ずっと同じ位置 浜口 佳春

谷

峡谷の落人村に風遊ぶ 佐藤 雅子
 越し方の人生山谷八十八の秋 山本美代子
 谷合の紙漉く家に男子生る 金谷 友江
 人の世の谷間は深しおみなへし 周東 澄江
 菊挿して谷あひ深き母の墓 中島富士子
 谷川の浅瀬を下る祭笛 河合富美枝
 赤とんぼ谷渡り来て伊勢平野 井村 善也
 自由題

浄土誌上句会のお知らせ

題

⑤季語ではありません

棒 煙 自由題

締切・二〇〇五年十一月二十日
 発表・『浄土』二〇〇六年一月号
 選者・増田河郎子（『南風』主宰）
 応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
 ●特選各1名・佳作各3名
 ●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
 宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
 月刊『浄土』誌上句会係

香焚きて色なき風に目覚めけり 河合富美枝
 秋晴や縁をよぎりし蝶の影 中島富士子
 奔放のかげの伸びゆくなだれ萩 周東 澄江
 心癒す秋の夜空を浮遊して 金谷 友江
 足うらにひやりと廊下秋たしか 山本美代子
 満開を野分の道連れ百日紅 中島 一子
 鬼やんま庫裡に遊ばせ午睡かな 佐藤 雅子
 径なりの風癖つきし早稲田刈る 片桐てい女
 水に照る秋日へ大鯉の口 一丁田美恵
 日盛りの影ひきずりし葬の列 浜口 佳春
 夕かなかな湯あみ女の肌透けぬ 増田 信子
 炎昼の逃げどころなき島の路地 東 保

さっちゃんねネ...

25 かい目

かまち♡よろう



編集後記

若者のうざいとつぶやく冬の月 岱潤

仏教情報センターのテレホン相談員を始めて早いもので二十一年が経った。お布施の相談などが多かった時期もあったが、最近では直接仏教とは関係がなく、病気の相談や人間関係の相談など深刻な相談が多い。

先日久しぶりに仏教の教えを求める相談を受けうれしくなった。相談者は五十歳の女性で、「自分の性格、心の弱さを何とか治したい。仏教の教えで心がもつと強くなり、いい人間になれるような言葉を教えて欲しい」というものだった。私は「人間は皆弱いものです。時に悪いことを考えたり、間違いを犯してしまうことだってあるでしょう。でもそんな私

も仏さまがちゃんと護ってくれている、何時も見えていてくれているということを意識してください」と言ったところ、「そんなことは聴いていない、佛など今信じられない。支えてくれる言葉、教えが欲しい」と言われてしまった。

そこで釈尊が悟られたときのお話をし、「人生は苦だ、苦とは自分の思い通りにならないことを思い通りにしようとするからだ」と釈尊はお説きになったことを伝えた。だから思い通りにならないことは思い通りにしようとしなければいい、そして釈尊は方法論として中道を選択したと申し上げた。

三十分以上の電話の後女性は、「仏さまを信じたい」と仰ってくれた。(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十一巻十一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十七年 十月二十日

発行 平成十七年 十一月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

月刊 浄土 もうすぐ 800号



法然上人鑽仰会

HOUNENSYOUNIN SANGOUKAI



法然上人鑽仰会

月刊「浄土」

浄土の広場

月刊「浄土」検索



| お知らせ | 会員募集 | サイトマップ | メール |



法然上人鑽仰会

(C)2002 HOUNENSYOUNIN SANGOUKAI. All rights reserved.

法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会では通巻 800 号記念事業の一環としてホームページの整備を行っております。

ホームページでは今までに刊行された浄土の目次検索や一部本文の検索などができますし、内容も一部提供してインターネット上でお読みになることができます。

また浄土の広場では、インターネット上から俳句の投稿などもできます。どうぞご覧ください。

<http://honen.sangou.net>

<http://gekkan-jodo.info>

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



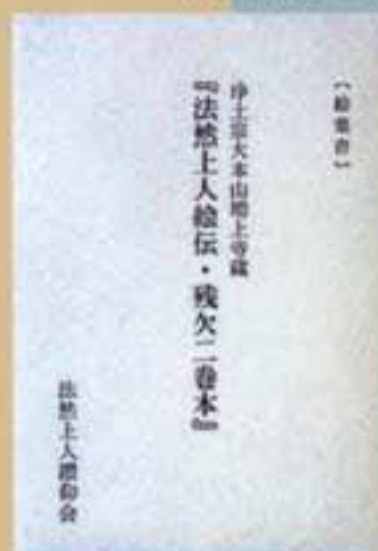
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036